

浦幌町における蝶類の出現期

—特にセセリチョウ科について—

円子紳一

▼はじめに

セセリチョウ科の仲間は、その殆どが地味な色をした小型種で、飛翔も直線的で俊敏なため、一般の人達にはあまり知られていない。しかし、山道などでは汗ばんだ手や腕に静止し、体の割には大きな眼をキヨロつかせるなかなかの愛嬌者である。

北海道に産するセセリチョウ科は15種類(Table 1)のほかにダイミョウセセリ、スジグロチャバネセセリ、ヘリグロチャバネセセリ、キマダラセセリ、ヒメキマダラセセリ、イチモンジセセリ、ギンイチモンジセセリ、ヒメチャマダラセセリ)であるが、ダイミョウ、スジグロチャバネ、ヘリグロチャバネの3種は、北海道では西南部のみに知られているだけである。

また、1973年には日高山系アポイ岳で北海道大学昆虫研究会のメンバーによって、日本未記録のヒメチャマダラセセリが採集されて大きな話題となつた(北大昆虫研究会、1975)。その後、1959

年に三国峠においても採集されていたことが判明した。

北海道東部で知られているのは11種類(Table 1)とキマダラセセリ、ヒメキマダラセセリ、イチモンジセセリ、ギンイチモンジセセリ)で、浦幌町内では7種が採集されている(松本、1975、1976・円子、1976a)。今後、浦幌町内で発見される可能性のあるものは、道東に産する残りの4種であるが、ともに食草がイネ科を主としていることから大きな期待がもたれる。

▼チャマダラセセリ

Pyrgus maculatus Bremer et Grey



採集地：万年

採集年月日：1976.5.7

採集者：円子紳一

浦幌町郷土博物館所蔵

種名	5月	6月	7月	8月
チャマダラセセリ				
ミヤマセセリ				
キバネセセリ				
カラフトタカネキマダラセセリ				
コキマダラセセリ				
コチャバネセセリ				
オオチャバネセセリ				

Table 1 セセリチョウ科の出現期

目次

- 浦幌町における蝶類の出現期——特にセセリチョウ科について——……………円子紳一………2
 浦幌炭礮の街並み形成について……………谷向繁…………4
 東山でイシダシジミを探集……………円子紳一………10
 オルベチャシ跡について……………後藤秀彦…………11

表紙説明

1917(大正6)年6月17日、第一浦幌尋常小学校(現吉野小学校)校庭で開催された、第一浦幌尋常小学校・養老尋常小学校連合運動会記念撮影。前列には岐阜農場の関係者が席を占めている。

北海道においては東部のみに分布している。発生は5~6月の年1化であるが、本州の暖地では2化・3化が通常とされているし、道内でも飼育下では夏型（2化）が得られていることなどから、年によっては野外における2化の発生も全くないとは言えないのではないだろうか。浦幌町内においては5月下旬から6月上旬が発生の最盛期である。

▼ミヤマセセリ

Erynnis montanus Bremer



採集地：帶富
採集年月日：1973. 5. 14
採集者：円子 紳一
浦幌町郷土博物館所蔵

年1化。北海道では4月下旬~6月上旬頃に発生する（白水、1971）とされているが、浦幌町内においては若干遅れて5月中旬~6月中旬となり、年によっては5月上旬にも採集することができる。本種は、チャマダラセセリと共に春一番に出現するセセリである。

▼キバネセセリ

Bibasis aquilina chrysoglia Butler



採集地：常豊
採集年月日：1965. 7. 22
採集者：阿部 宏
浦幌町郷土博物館所蔵

年1回の発生。7月下旬から8月上旬が最盛期である。この時期は多くの蝶達の出現最盛期であり、樹上のゼフィルスを追いながら疲れた顔を下に向けると、黄褐色ですんぐりした体の本種を目にすることがときどきある。

▼カラフトタカネキマダラセセリ

Carterocephalus sylvicola issikii Matsumura



採集地：万年
採集年月日：1975. 6. 14
採集者：松本 尚志

浦幌町郷土博物館所蔵

北海道特産種で北海道東北部のみに生息している。浦幌町における最初の発見は、1975年6月（東山・万年）の松本尚志（1976）によるが、その後、現東山森林公園の整備前に行った調査でも採集され、発生期には少くないようである。6月中旬から下旬にかけて発生し、年1化。

▼コキマダラセセリ

Ochlodes venata herculea Butler



採集地：帶富
採集年月日：1972. 7. 6
採集者：円子 紳一
浦幌町郷土博物館所蔵

最も多く目にするセセリチョウの一種で、7月下旬から8月中旬が出現最盛期であるが、早いものは6月下旬、7月上旬には姿を現わす。浦幌町における最も早い記録は、1971年6月26日である。年1化。

▼コチャバネセセリ

Thoressa varia Murray



採集地：千歳
採集年月日：1971. 6. 26
採集者：円子 紳一
浦幌町郷土博物館所蔵

日本特産種。暖地では年2化といわれるが、北海道では年1化（南部では2回発生の年もある）である。6月下旬から出現し、7月中旬から8月上旬が最盛期となり、普通に見られる。

▼オオチャバネセセリ

Polytremis pellucida Murray



採集地：平和
採集年月日：1976. 8. 1
採集者：円子 紳一
浦幌町郷土博物館所蔵

暖地では年2化の発生といわれるが、北海道では1回の発生。7月から8月の出現とされているが、浦幌町内においては8月上・中旬の記録しかない。出現期は非常に短期間であるが、セセリチョウの仲間では一番おっとりしていて採集は容易である。別名ハナセセリとも呼ばれる。

▼おわりに

春、5月。樹々の芽が一斉に吹く頃になると、ミヤマセセリ、チャマダラセセリが姿を現わし、6月下旬にコキマダラセセリ、コチャバネセセリと入れ替る。その移行期にカラフトタカネキマダラセセリが数日間出現する。7月下旬にキバネセセリ、最後は8月に入ってオオチャバネセセリが出現して、8月末には全てその姿を消す。

このように同じセセリチョウ科でも、種によって発生する時期が異っている。その要因として、食草の成育状態、気温などへの適合の仕方が種によって様々であることが考えられる。例えば、ヤママユガのある種では、低温を経験することによって、蛹が休眠からさめ、春の気温上昇に反応して羽化する。また、ギフチョウでは低温を経験しなくとも気温が23℃前後であれば、前胸腺ホルモンの分泌が促され、成虫形成が始ることなどがある。

セセリチョウ科では、なにが要因となって発生が決定されるのだろうか。チャマダラセセリは、本州では年2化で春型と夏型が発生することが知られている。これは、〔春型→夏型〕→〔春型→夏型〕と世代交代するのであるが、北海道では春型（年1化）だけでの世代交代である。実験室では、北海道でも夏型の発生が確認されているが、どのような過程で「型」の置き替えがなされるのか、興味深い事柄である。

普段、チョウに興味のない人でも、春の庭に翔び交うモンシロチョウや夏にユリの花を訪れるカラスアゲハを見たならば、きっと「美しい」と思い心が和むに違いない。そのことが、私達の生活に欠くことのできない潤いのひとつであるとしたなら、1頭のチョウの生活を守るために自然に親しみ、自然に対する理解を深めることがこれから私達に課せられた仕事であるように思う。

（浦幌町農業協同組合営農部）

引用参考文献

- 飯島一雄（1977）『釧路湿原とその周辺の昆虫類』
『釧路湿原』釧路叢書18
白水 隆（1971）『原色図鑑 日本の蝶』
——・原 章（1972a）『原色日本蝶類幼虫大図鑑』I
——・——（1972b）『原色日本蝶類幼虫大図鑑』II
藤岡知夫（1972）『図説 日本の蝶』
——（1975）『日本産蝶類大図鑑』
北大昆虫研究会（1975）『北海道の高山蝶 ヒメチャマダラセセリ』
松本尚志（1975）『浦幌町における蝶類の分布』
『浦幌町郷土博物館報告』6
——（1976）「カラフトタカネキマダラセセリの発見及びその採集について」『浦幌町郷土博物館報告』7
円子紳一（1973）『浦幌町の蝶類レポート I』
『浦幌町郷土博物館報告』2
——（1976a）『浦幌町郷土博物館所蔵の阿部宏氏の蝶標本』『浦幌町郷土博物館報告』7
——（1976b）『浦幌町における蝶類の出現期』
『浦幌町郷土博物館報告』7

浦幌炭礎の街並み形成について

谷 向 繁

I. 浦幌炭礎の概略

本礎の主要礎である双連・太平両礎区の採掘権は当初、古河礎業株式会社にあったが、1913（大

正2）年、当時本町内において既にいくつかの礎山を経営していた大和礎業株式会社（本社：大阪市東区和泉町 社長：平林甚輔）へと譲渡された。